

# 要 約

報告番号	① 乙 第	号	氏 名	山 田 有 佳
主 論 文 題 名				
The Effect of Improving Oral Hygiene through Professional Oral Care to Reduce the Incidence of Pneumonia Post-esophagectomy in Esophageal Cancer (食道がん切除術後の肺炎発症を減少させる専門的口腔ケアによる口腔衛生改善効果)				
( 内 容 の 要 旨 )				
<p>胸部食道がんに対する開胸の根治的手術は、侵襲的で術後合併症が多く、中でも術後肺炎は最多で、院内死亡率および生存率にも影響するという報告がある。肺炎の抑制には術前からの対策が重要であり、術前口腔ケアはその一つである。クロルヘキシジンを用いた口腔ケアが術後肺炎および人工呼吸器関連肺炎の発生を抑制させることは既知のことであるが、歯科専従者によって行われる術前からの専門的口腔ケアは、クロルヘキシジンを用いただけの口腔ケアより肺炎の発症を抑制したと報告がある。しかしこれまでの研究は、口腔ケアの有無や口腔衛生状態そのものと肺炎の抑制との関係のみが報告されており、専門的口腔ケアにて口腔衛生状態が改善しその結果として術後肺炎の発症が抑制できたかどうかは明らかでない。本論文はその関係性を後方視的に調査した。</p> <p>対象は初診時と手術直前の口腔衛生状態の評価がある、2・3領域郭清と胸骨後経路胃管再建した開胸手術症例で、肺合併切除例、間質性肺炎の既往歴、頭頸部がん・肺がん・頸部食道がんの治療歴、R2切除例は除外した。術後1週間以内の術後肺炎の発生率を主要エンドポイントとした。対象となった46例について口腔衛生状態を評価し良好群と不良群に分類したところ、初診時は24例が口腔衛生不良群で22例が良好群であった。口腔ケアを行い、手術直前には37例が良好群で9例が不良群となった。口腔衛生を維持もしくは改善したかどうかによって全体を2つに分類すると、口腔衛生を維持または改善した（コントロール良好群）のは39例で、7例は改善しなかった（コントロール不良群）。術後肺炎は全体で8例発症し、コントロール良好群では39例中4例で発症し、コントロール不良群では7例中4例で発症した。術後肺炎を従属変数として解析を行うと、手術直前の口腔衛生状態良好群と口腔衛生コントロール良好群において有意に肺炎が減少した。この因子を独立変数として用いたロジスティック回帰分析をそれぞれに対して行うと、口腔衛生状態が良好な群は術後肺炎のリスクは低く（OR 0.152, 95%CI 0.028-0.809）、コントロール良好群においても術後肺炎のリスクが低いことを示した（OR 0.086, 95%CI 0.014-0.529）。</p> <p>従来は口腔衛生状態自体および口腔ケアの有無と肺炎との関連が議論になっていた。本研究によって、術前の専門的口腔ケアは口腔衛生状態を改善させ、その結果、術後肺炎の発生を抑制させる可能性があることが示された。しかし、本研究は後ろ向き調査でかつサンプルサイズも小さいため、今後より大きなサンプルサイズで前向き試験として検証する必要がある。</p>				